

民謡を通して広島県の文化や生活の一面を探る

レイラーニ・ホワイティング

はじめに

本論は筆者が参考文献に示した文献を読み、それらから得られた知見をまとめている。
民謡はずっと昔から歌われてきたが、日本の伝統的な音楽すなわち雅楽やそのジャンルの音楽の方が優先した。民謡は主に無視された。現在残っている民謡はたいてい江戸時代ぐらいの民謡である。民謡とは何かというと、「口頭に伝わってきて、作者は知られてなく、演奏者がある程度自由に曲を変えることができるという音楽」(Malm 1990年で筆者訳)である。日本では長年の封建的な生活や相互の通信の欠如があった。日本の民謡は地域によってだいぶ違っていることはこの原因によると考えられる。本論では、広島県の民謡を研究し、お米の耕作、特に田植えを中心にして、民謡を通して文化や生活を探った。

1. 広島県の民謡の特徴

中国放送編の「広島県の民謡」(昭和46年)によると、広島県の民謡は明朗性や開放性が特徴なる。ほとんどの民謡が陽気で曲調が明るい。東北地方や山陰地方の民謡はとても有名だが暗く悲惨な生活を歌ったりする民謡が多いそうである。広島県の民謡の中で悲観な内容のものは非常に少ない。

広島県の民謡はなぜこのような特徴があるだろう。理由はたくさんあると思うが、まず広島県の自然を見てみよう。「火山、地震、津波がなく、台風も九州や四国に遮られて、広島県を直撃することは少ない」(有田吉之1984年p. 18)。広島県は温和な気候で土地が肥えた地域である。物産の豊富さを誇った国である。江戸時代は芸州広島藩が42万石で備後福山藩が10万石であった。土農工商を区別された江戸時代は迫害を受けた時代で農家にはとても苦しくて大変な生活であったと言われている。ところが広島は平和な生活であった。「苛れん誅求」(人民の側の事情などを無視して、一方的に無理やり税金を取り立てること『新明解国語辞典』)の行われたことのなかったことは歴史の教える所である。

2. 広島県の民謡の楽器の特徴

1989年広島県教育委員会に行われた調査によると、調査曲数全体の38パーセントは楽器が使用されている。世界の民族の楽器「クルト・ザックスの五分類法」という五つの種類(膜鳴楽器・体鳴楽器・弦鳴楽器・気鳴楽器・電鳴楽器)に分けられる。

膜鳴楽器・は「強く張った膜状のものの振動によって音を発する楽器の総称。大部分はたたいて音を出す太鼓の類」(『大辞泉』)である。膜鳴楽器は広島県の民謡に最も多く使われた種類の楽器である。膜鳴楽器の中では大小に分けられる。締太鼓の大は全体の9パーセントで囃し田や盆踊歌によく使われて、小は全体の8パーセントで囃し田や風流系の太鼓踊や神楽に使われている。他方鉦打太鼓の大は17パーセントの曲に使われているのに、小は2パーセントしか使用されていない。

体鳴楽器は「それ自体の振動によって音を発する楽器の総称。打つ、振るう、こする、はじく、など様々な奏法のものがある。」(『大辞泉』)である。鉦、拍子木、ささら、鈴などが含まれる。こういう種類の楽器は10パーセントの曲に使われ、囃し田や神楽で用いられる。

気膜楽器は「空気そのものが振動して発音体となり音を発する楽器の総称。」(『大辞泉』)である。神楽笛や篠笛など横型の笛と縦型の尺八が含まれている。横型の笛は神楽や囃し田や風流系の太鼓踊など全体の6パーセントの曲に認められるが縦型は祝い歌などの一部の曲に1パーセントに認められるにすぎない。

弦鳴楽器は「弦の振動によって音の発する楽器の総称。」(『大辞泉』)です。三味線が含まれている。全体の2パーセントの曲だけに認められ、盆踊歌や祝いや騒ぎ歌の一部でしか使われていない。「このように気鳴楽器や弦鳴楽器、特に尺八と三味線の使用頻度の極端な少なさは、広島県の民謡の特色の一つである」(p. 45)

3. 広島県の民謡の内容別

『広島県の民謡』に出てくる歌の数を表一に示す。民謡は労作歌・祭り歌、祝い歌・踊り歌、舞踊歌・座興歌・語り物、祝福芸の歌・子守歌・わらべ歌という七つの種類に分けられる。この中で広島県の民謡には労作歌が最も多い。労作歌の中で農耕に関するものが一番多い。ここで広島の社会について、民謡を歌った人達の主な仕事は農耕ということが分かる。なぜ農耕の仕事をしながら民謡を歌ったんだろうか。過去の社会は肉体労働はとても過酷なものであった。広島県教育委員会が1989年に書いた広島県の民謡によると、民謡は労苦を和らげる方途であった。同時に、調子を合わせて、仕事の能率をあげるためのものであった。「具体的には『労苦を和らげる歌』『仕事の調子を合わせる歌』『仕事の進行を規制する歌』『作業方法を合図として教える歌』等が存在したものである」(広島県教育委員会1989年p. 10)。労働能率や生産に結びつく内容のものが非常に多い。

労作歌の次に多いのは祭り歌・祝い歌で、踊り歌・舞踊もかなり多い。 JAPAN, An

表一

小計

総計

A 労作歌	a) 農耕に関するもの	365	
	b) 山樵に関するもの	53	
	c) 漁ろうに関するもの	33	
	d) 諸職に関するもの	100	
	e) 交通・運搬に関するもの	54	
	小計		605
B 祭り歌・祝い歌	a) 祭りに関するもの	55	
	b) 祝儀に関するもの	66	
	c) 行事に関するもの	42	
	小計		163
C 踊り歌・舞歌			140
D 座輿歌			24
E 語り物・祝福芸の歌	a) 語り物	3	
	b) 祝福芸の歌	3	
	小計		6
F 子守り歌			30
G わらべ歌	a) 遊戯歌	156	
	b) 唱えごと	2	
	小計		158
H その他			1
総計			1127

Illustrated Encyclopaedia によれば、祭りは主に宗教を起源とし、お米の耕作と共同体の霊的な福祉に関係ある。祭りということは参加者と神とそのコミュニケーションの象徴的な行為で、ごちそうを通して参加者の間の交わりもある。祭り歌に神・宮などという信仰を表す言葉がよく出てきて、宗教の関係が分かる。広島県の賀茂郡の祭り歌の宮節の歌詞を例として挙げれば、宗教の関係がよく分かる。

「宮にや参ろうやヨー鎮守の宮にやヨー
 小田の神楽にやヨー御巫の舞ヨー
 幟はためく八幡様にやヨー
 今日はお祭り小田神楽ヨー。」

(歌詞—広島県教育委員会1989年)

踊り歌の中で盆踊りの歌はとても多い。お盆は仏教の行事であり、また宗教の関係が認められる。こうして農民には宗教の有意義さが分かる。

他の範ちゅうに関しては、表一に分かるように、わらべ歌は踊り歌より少し数多い。子守り歌や座興歌はもっと少ないが語り物・祝福芸の歌が一番数少ない。

4. お米に関する民謡

前に述べたように、本論ではお米の耕作を中心として民謡を通して文化や生活の一面をさぐるつもりである。なぜお米の耕作を中心することにしたのかというと二つの理由がある。第一は労作歌が一番大きな範ちゅうであり、その中に農耕に関するものが最も多い。その農耕に関する歌の中でお米の耕作についての民謡がたくさんあり、広島県とその回りの県の中国地方は田植え囃しということが特徴になった。第二の理由は日本人にとっての重大さである。

日本人の主要な食べ物はお米なので、お米の耕作に関して探ったら、文化や生活についての分かることがよく出てくるだろうと思った。お米が育たなかったらとても困る。近代までは、税金はお米で払った。お米が育ったにしろ育たなかったらにしろ、税金は払わなければならない状態であった。お米を育てることに関して、天気は主な要素である。梅雨が来ないと水不足になって、お米が育たない。お米の耕作はとても大切なものなので、お米の耕作に関する行事は労働だけではなく、信仰的なものもたくさんある。

5. 田植えとは何か

田植えとは何かというと「苗代で育てた稲の苗を水田に移し植えること」(『大辞泉』1995年)。Dorson (1980年)によると、田植えはお米育ちの一番重要な過程である。年中の最大の儀式は田植えの時である。お米は紀元前300年—紀元後300年に日本にもちこまれた。その時は田植えではなく、直接苗を田んぼに植えた。5—6世紀に田植えが始まった。だから田植えは長い間続いている。『広島県の民謡』によると共同集団性ということは一つの社会について分かることである。個人的な社会ではなく、皆と共に歌ったり、働いたりした。「民謡は生活の中で民衆と共に生まれ、育てられ、皆んなに馴れ親しみをもたれ、共通の認識や理解が底流にあって歌われるものであった」(p. 11)。田植えを集団で行うのは一つの例である。皆が働いて、皆が働きながら歌ったりした。昔は村として田植えが行われた。その田植え囃しや呼応の形の田植え歌と一緒に働くことを強調しているのだろう。また引用すると「この意味で共同集団性といった機能を通じ、民謡は人と人との結びつきを強化させ、馴れ親しみ、親近感を強化させ、地域共同体としての共属の連帯感補強にも大いに役立つものであったのである。」(p. 11) JAPAN, An, Illustrated Encyclopaediaによると、日本の「家族」という概念がお米の耕作の背景の中に出てきた。「結」ということは「農作業などで、互いに労力を提供して助け合う」

(岩波国語辞典1994年)。現在に見られる共同体意識は結の影響であると考えられる。

6. 田植え囃しとは何か

田植え囃しとは何かというと「田植に際して音頭(男性)が楽器を奏しながら早乙女(女性)と交互唱で田植歌を歌い、それに打楽器を中心としてアンサンブルがついて囃す習俗は古くから稲作農耕民族に存在していたと思われる。」(内田1978年)。田植え囃しの音楽は稲の豊作祈願と田植えの労働能率の促進という二つの機能を持っている。内田(1978年)によると、昔は田植え囃しが各地にあったであろうと思われるが、現在はほとんど残っていない。広島県・島根県の山間部、つまり中国山地と奄美群島の徳之島に残存している。その所では、田植え囃しは喜ばしい儀式として代々と伝えられた。日本の他には韓国南部の島嶼珍島とネパールと中国にもある。

7. 田植え囃しにはどのような楽器が使われているか。

内田(1978年)によると、田植え囃しには膜鳴楽器・体鳴楽器・気鳴楽器は使っているが弦鳴楽器は使っていない。

膜鳴楽器の機能は田植えの動作のリズムを支配することであるけれども、太鼓の奏法が単にリズムのみでなく、美観もそえる。田鼓と小太鼓と大太鼓はとても重要な楽器である。

体鳴楽器の中で何が使われているかというと、ささら(clapper)・鉦(gong)・銅拍子(cymbal)・拍子木(clapper)である。

ささらは「日本の民俗楽器の一種。長さ約30センチの竹の棒の約三分の二を細かく割ったささら竹とささらこ(側面に鋸歯に似たギザギザと刻んだ30センチぐらいの木の棒)をすり合わせて音を出す。さらさらと音が出す」(『大辞泉』1995年)。ささらはさげさん(リーダー)によって打ちならされ、田植えの進行全体を采配するために用いられる。広島県(山県郡・高田郡)の特色はささらこを使わず、二本のささら竹を使って打ち合わせる場合が非常に多い(内田1978年p. 127)。

鉦は二種類がある。広島県に使われているのは歌舞伎ばやしに用いられているのである。これがブリキ缶の浅い蓋に類したような形のものを左手にひもで吊し、右手に持った槌で表面を打つ。銅拍子は二枚の中央の部分がふくれている円い皿形の盤である。中央にひもがついて、それを左右の手でそれぞれにぎって、二枚を互いに打ち合わせる。普通は鉦か銅拍子が使われている。拍子木は長方形の棒を左右の手一本ずつ持って打ち合わせる。拍子木はほとんど使われていない。拍子木、銅拍子、鉦はリズムに多彩さをそえる機能がある。

気鳴楽器では篠笛と神楽笛が使われている。篠笛について内田(1978年)がこう述べる。「田

植え囃しの音楽の旋律にあしらい吹きで篠笛がみられる。これはリズム楽器が主体な田植え囃しの楽曲に、美しい情趣をそえるものである。」篠笛の方が用いられている。

8. 田植え囃しの音楽

田植え歌は二種類に分けられる。本論で中心となるのは囃し田と仕事田である。広島県教育委員会(1989年)によると、仕事田は「普通の田植え、つまり結(ユイ)に基づく共同作業によっておこなわれる能率本位の田植えのことである…仕事田でも歌い囃すが、至って質朴であり、鳴り物も太鼓ひとつとか、鍬をさかさにして叩くようなことが多かった」(p. 50)。一方、囃し田の田植えは「田の神様である『さんばい』様をお迎えして、その加護のもとに田植をするという考え方が中心となっている。そのため田植えに際しては畔に神様を祭って新しい苗や供物を供え、祝詞を奏して神様の御降臨をこい願う行事がとり行われる」(中国放送編昭和46年p. 121)。昔は囃し田が花田植えや田楽などの種類に分けられたが、昭和30年ごろ、広島県ではすべて「囃し田」に統一した。

田植えをしながら「おろし」と「ゆり」という二つの種類の歌を歌う。音頭が歌うものは親歌といい、早乙女が歌うものは子歌という。「おろし」という歌は音頭がうたうものと早乙女が歌うものは同じ歌詞で、繰り返して歌う。例えば、「さてもよい鳥よね八石とうたうた」は

「さてもよい鳥よね八石と
 ヤーハイ ヤレ よね八石とうたうた
 よね八石と
 ヤーハイ ヤレ よね八石とうたうた」

のように歌う。「ゆり」という歌は音頭と早乙女が歌う歌詞が違って、「さんばいは今こそおりやる宮の方から 手の駒にて網ゆりかけ」は

「さんばいはヤレ今こそおりやる宮の方から
 ヤレ宮の方からヤーレ 手の駒に手網ゆりかけ」

のように歌う。「おろし」も「ゆり」の上の句と下の句のように意味が完結する歌い方である。(中国放送編昭和46年p. 122)

9. 田植えという行事はどのように行われるか

最初は苗代への行進がある。苗代から苗を取ったら、音頭と囃し方と早乙女が田植えをする田へ行進する。音頭が指揮し、囃し方が囃し、早乙女が従っていく。田んぼに着くまでに曲調があるが歌詞はない。さんばい様をお迎えするためには朝歌う歌はさんばい様をほめたたえる

歌が含まれている。朝から晩まで、「おろし」と「ゆり」の歌を交互で歌って、田植えの作業が全部終わったら「あがり」を歌う。この歌で早乙女は田からあがる。Dorson (1980)を要約すると、男性は土地を耕したり、土地を平らにしたり、稲の苗を運んだりする。田植えは神聖な仕事で伝統的に女性の仕事なので、女性が苗を植える。早乙女という苗を植える女性は新しい服を着て、頭に白いタオルをかぶって、腰を赤いひもを結ぶ。一日で終えるために一日中グループとして働く。

おわりに

広島県の民謡は色々な特徴がある。広島県の民謡は一般に明朗な曲や歌詞である。広島県は田植え囃しが残っている少数の県の一つである。本論では民謡を通して広島県の文化や生活について探したが、出てきた結果、例えば田植えの影響の共同集団性や共同体意識は広島県に限らず日本全体について同じことが言えるだろう。JAPAN, An Illustrated Encyclopaediaから引用すると「農業に関して働く率がもう日本の人口の14パーセントまで少なくなかったが、昔からお米の農業を続いていた村々に固く守られた習慣や尊重(価値)は今でも現在の社会に強力な影響である。例えばとして、日本の民族の文化は農家の自然にたいしての尊敬や恐れを反射する。」(p1262)

ずっと昔から音楽そして様々な楽器に興味を持っていた私には本研究のテーマはとても面白かったのであった。高校時代、音楽を選択科目として取っていた時に、色々な話を聞くことができた。ある音楽教師が大学時代の研究を振りかえりながら、民族音楽の面白さを伝えてくれたり、また、バルトークの協奏曲について学んだ時、ハンガリーの民族音楽を主題に協奏曲を作ったことを知った。この作品に限らず、バルトークの音楽にはハンガリーの民族音楽の影響が認められる。このような勉強が民族音楽についての興味をもっと増やした。そして今回、日本の民謡を研究することができた。前に述べたように上流階級の間では日本の伝統的音楽・雅楽などを愛好し、民謡は無視され続けて来た。だが、本論で分かるように、民謡は民族の生活の中心であった。ある程度まで民謡民族が日本人の生活に形づくった。例えば田植えや稲刈りを村をあげて行い、協力しあうことによって大切な地域共同体という概念を習得し、それは現在でも通じるものである。

(8)

参考文献

有田吉之 1984年 ぼくらの広島県 発行者 久保田忠夫

中国放送編 昭和46年 広島県の民謡

Dorson R. M 1980年 Studies in Japanese Folklore Arno Press

広島県教育委員会 1989年 広島県の民謡

Kodansha 1993年 JAPAN, An Illustrated Encyclopaedia

金田一京助 他 1980年 新明解国語辞典 三省堂

Malm W. P. 1990年 Japanese Music and Musical Instruments Charles
E Tuttle Company

内田るり子昭和53年 田植えばやし研究 発行者 長坂一